ライスシャワーの耳かき

蒼月柊

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そこそこぱかライブＴＶ　Ｖｏｌ．３　でライスシャワー役の方がＡＳＭＲをやりたいと言っていたので、思わず書いてしまいました。

頼むサイゲ、いくらでも出すからウマ娘たちのトレーナーに向けたＡＳＭＲを発表してくれ！　頼む！

なお、台本は書いたことがあまりないので、ＡＳＭＲ台本風小説形式（ややこしい）となっています。

ライスシャワーのお声で脳内補完しつつ、お楽しみいただけると嬉しいです。

それではどうぞ。

目　次

ライスシャワーの耳かき ―――― 1

ライスシャワーの耳かき

リビングの明かりもつけずに、ライスシャワーはソファに座っていた。微笑みを見せる彼女は自分の腿をぽふぽふと叩く。
「耳かきをしたいな」
その言葉に従って、頭をライスシャワーの腿に置いた。
「それじゃ最初は右耳から」
耳かきの先が耳に触れる。耳の中をくすぐられる快感とライスシャワーの体温にまぶたが重たくなる。
「眠たくなったら眠っていいんだよ？」
吐息まじりの小さな笑い声がだんだん遠くになっていった。

＊

「いつもお疲れさま。お仕事は大変だね。
どうしてわかるのかって？　だって、夜に見る顔がいつも眠そうだもん。いつも頑張っているってわかるよ。
だからね、今日は少しでも疲れが取れるようにって思ったんだ。……本当はいつもやらせてもらえると嬉しいんだけど、だめ、かな。
なんて、聞こえていないよね。……やっぱりライスは悪い子だ。でも、いつかちゃんと言えるようになれたらいいな。
耳かきはどうかな。眠っているってことは気持ちいいんだよね。それとも、それだけ疲れていたってことかな。
そんなに頑張らなくていいんだよ。ライスも一緒に頑張るから、その想いは自分のために使ってほしいな。……それだけ想われていることはとても嬉しいけれど、もっとライスを見てほしいな。もっと、ライスと一緒にいてほしいな。
……ちょっと恥ずかしくなってきちゃった。大丈夫かな？　気づかれていないかな？」

＊

「ふー、よし、右耳はきれいになったね。それじゃ次は左耳にと、えへへやっぱりかわいいなあ。この表情（かお）だけはライスだけのものだから。これからもずっと。

……体を動かしても起きられないほどに疲れていたんだね。いつもありがとう。でも、やっぱり心配だよ。いつか離れてしまうんじゃないかって、怖くなる。あなたはきっと離れないって言ってくれるだろうけど、あなたが死んでしまったら離れてしまうんだよ？

だから、頑張りすぎないでほしいな。頑張るときは一緒に、ね。

レースに出ていたときもそうだったんだから、これからも一緒にいてほしいよ。そのためだったらなんだってする。この幸せが続くためなら、頑張るよ。

……えへへ、あなたと一緒だね。ライスもあなたのためなら頑張っちゃいそう。だからやっぱり一緒がいいな。これからもずっと」

＊

意識が戻ってきても、体を動かすことはできなかった。首を動かすと狭いソファにライスシャワーが体を抱きしめて横になっているのが見える。

どうにか腕をライスシャワーから抜いて、ライスシャワーの頭を撫でた。所々から跳ねてしまう髪質とは思えないほどに触り心地がよい髪を触りながら、外が明るくなる様子をずっと眺めていた。